



右の写真は、文化8年の序を持つ、堤朝風編・英遵補定の『近代著述目録』の抜書です。筆跡から有文が作成したものとみられ、“ほしいものリスト”のような位置付けだったようです。

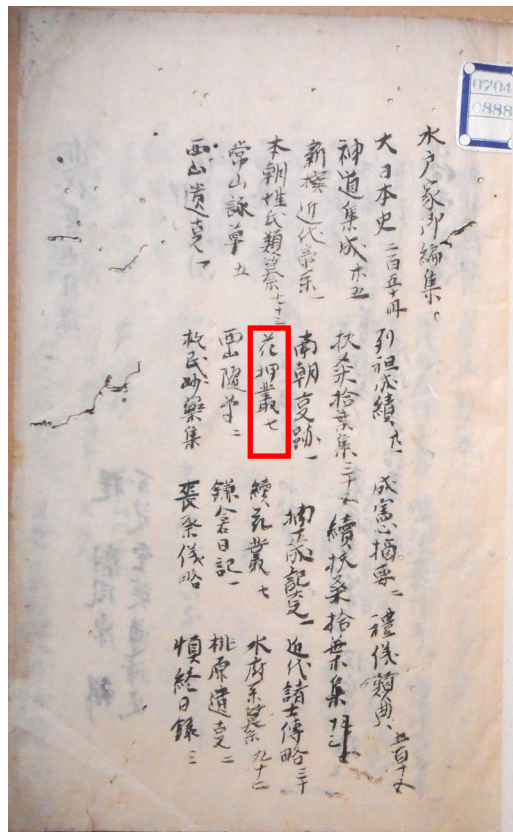
ここに掲出されている『花押叢（藪）』（丸山可澄編）や『日本百将伝抄』（林鷲峰編）は、前頁柱で紹介した文政の目録に記載されています。共に「印」と注記されており、板本を購入したのでしょうか。

同じく掲出されている『万世雲上明鑑』（速水房常編）の抜書が、山口図書館多賀文庫内に残っています（W175.2/A）。天保の目録や文政の目録にも抜書として記載されていますので、有文はどこから借りて必要箇所を書写したのでしょうか。

《書籍代は経費…？》

蔵書を増やす上で問題となるのが購入費用です。

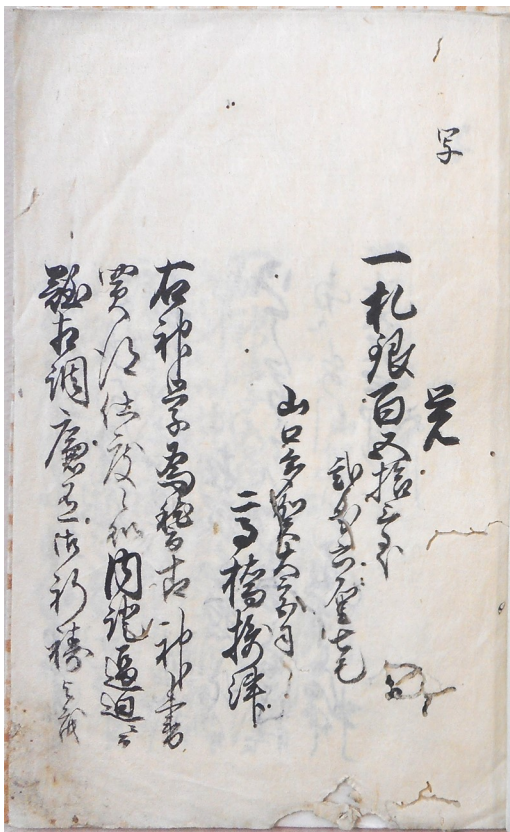
文化の目録481件中、写本の注記があるものは306件です。ということは、有文が当主になってからの30年間で150件以上を購入したと考えられます。当時の新刊本は、例えば『伊勢物語』全2冊が銀1匁8分ほどで、串団子（5～6文）の約32倍ということを見ると（『近世賃金物価史史料』）、決して安い買い物ではないでしょう。



近代著述目録（多賀社文庫1420）

そこで興味深いのが左の資料です。これは、文化4年と文政6年に、神学（神道）関係の書籍を購入したいけれども財政状況が厳しいため、藩に上納する米代の免除を有文が願い出た際の沙汰書の写の綴です。

多賀社は藩主等の祈祷を任されており、研鑽のために必要だとしています。神道を以て奉仕するのだから、そのための出費に配慮してほしいということでしょう。実際、多賀社の蔵書には神道・国学関係のものが多く含まれます。工夫をしながら書物を集めていたことが窺えます。



神学稽古神書買得御沙汰物写（多賀社文庫1187）

〔左資料釈文〕

写 覚

一、札銀百五拾三匁 式分六厘七毛

山口多賀大宮司 高橋撰津

右神学為稽古神書 買得仕度候処、内証逼迫二而 難相調廉有、御祈祷を茂

〔掲載部分ここまで、以下続き〕

被仰付身柄二付神道之 旨趣与得相弁度、右二付 多賀社江当ル歩引米代 取下之儀相願心懸之儀二付 御了簡を以一ツ書之通彼社江 当ル歩引米代取下被仰付候事、 文化卯ノ 五月